

共同研究 ● 家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究
—保育と介護の制度化/脱制度化を中心に (2014-2017)

この共同研究は、保育や介護をめぐるケアを、家族と社会の境界面でやりとりされるサービスととらえ、その制度化/脱制度化のありようを明らかにすることを通して、人間社会は、社会と家族のインターフェースをどのように編成してきたのか、今後それをどのように編成していこうとするのか、考察するものである。

問題の背景—「ポスト福祉国家」の時代

この課題を設定した背景には、近年の福祉やケアをめぐる問題状況に、文化人類学研究から応答しようとする意図がある。

今日、「福祉国家の危機」は、喫緊の問題としてひろく認識されるようになった。もはや福祉国家は支えきれない、という認識が世界規模で定着し、かつて福祉国家を標榜した国々が、福祉から穏便に撤退する道を模索している。政治、経済と思想の再編が起こっているのであり、それは1970年代以降の新自由主義の潮流として理解される。80年代以降、各国は、国家と市場の関係再編をはかり、さまざまな事業の民営化に突き進んでいった。EUのような国家を超える法的実体が出現したこともあいまって、国家の相対的な地位は明らかに低下した。

こうした世界をとりまく大きな流れの中で、社会の編成があらためて問い直されるようになり、研究者たちは、100年前に議論されたテーマに、あらためて取り組むようになった。「新しい共同性」「連帯」「社会的なもの」などは、そうした研究のキーワードである。ミシェル・フーコーやその後継者たちが「統治」という概念を提起したのも、このような問題意識と連続するものとして理解することができる (Burchell et al. (eds.) 1991 ほか)。筆者が2006年から2009年度に主催した共同研究も、同じ関心によるものだった (Mori (ed.) 2013; 森編 2014 参照)。

ケアの実践への注目

家族と社会の境界面の編成を主題として、本年度開始した共同研究では、「ケアの実践」に焦点をあてている。ケアの実



1970年代の市民運動によって開設されたキンダーラーデン (保育所)。東西ドイツ再統一後、家賃高騰によって、2013年に撤退を余儀なくされた。「こんなことが正しいのか?」という貼り紙がある (2013年10月、ベルリン)。

践は、対面的な人間関係によって編成される具体的な行為である。さまざまなアクターがどのように関わっているのか、個々のアクターがおりなす人格間の関係を、民族誌研究の視点からとらえて、アクターの多元性や、アクター間のネットワークを解明することをめざす。

この研究会では、行政による施策が未発達な地域で、独自のネットワークを発達させて行われているケアの実践と、福祉制度のもとで行われているそれを並置して考察する。また、難民や被災者など、国家の保護がゆきとどかない状況でのケアの実践や、市場化をとりこんだその様相もとりあげる。

歴史研究において、こうした直接的な人間関係の観察は、資料的制約によって限定されがちである。しかし、近年の福祉史研究は、福祉国家形成期における福祉供給者が多元的であり、慈善団体や自助組織などの中間団体が重要な役割を果たしていたことを「福祉の複合体」論として明らかにしつつある。そこで、本共同研究では、こうした福祉史研究を射程に入れて、学際的な議論の地平を開いていこうとする。

ケアの実践から浮かび上がってくる「家族」

「ケアの実践」への注目は、さらに、ケアの受け手の側への視点も喚起する。ケアを必要とする人が、何を求めているのか、どのような生存戦略をとり、誰にケアを担ってほしいのかなどは、一義的にとらえることはできない。

「家族」をどうとらえるのか、という問題も浮上してくる。ケアの実践に関心を寄せる研究者の眼前にあらわれてくる家族は、特定の構造によって規定される親族関係の範疇としての家族ではなくて、ケアが実践される空間を構成しながらケアのネットワークを編成する人の連鎖である。後者は、さまざまな場面によって輪郭を変えることがあり、家族と呼ばれることもあるが、別の名称で呼ばれることもありうる。本研究で私たちは、ケアの実践からフレキシブルに編成される、さまざまな家族のあり方に注目していく。

このような観点からとらえられる家族とは、小コミュニティの民族誌がしばしば描き出してきたような、労働力を再生産し、生産活動の組織に関わりながら社会と接続するものとしての家族ではない。生存に関わる実践—子育てや病者の介護・高齢者の生活の質の確保など—の場として、社会の編成に関わる家族である (西 2012 参照)。「家族と社会の境界面の編成」というこの共同研究の主題は、このような家族のあり方と響きあうものである。人々は家族と社会の境界面をどのように編成しようとしているのか、その最適な編成とはどのようなものか、個別のローカリティのもとで考察する。

ケアの国際比較について

この共同研究が問題をとらえる視角について、最近行われたふたつの国際プロジェクトとの関連から述べていこう。ひとつは、EUの第6枠プログラム人類学関連学際プロジェクト



ベルリン年長者週間。各団体がブースを出し、活動を紹介する（2003年6月、ベルリン）。

ト「親族と社会保障」（2004-2008）である。ドイツのマックスプランク研究所のパトリック・ヒーディーが中心となり、ヨーロッパ8か国の人類学・歴史学者を動員して、8か国の都市と農村の民族誌調査と歴史レビューが行なわれた。福祉において最重要なアクターは国家と家族・親族であるという認識のもとに、社会保障の観点から家族・親族を論じている（Heady (ed.) 2010）。

ふたつは、国連の社会開発研究所、ジェンダーと開発部門研究プロジェクト「ケアの政治社会経済」（2005-2009）である。南米・アフリカ・アジア・ヨーロッパの8か国を対象とし、それぞれの都市中間層のケアを比較した。ここでは、主要なケア供給者として、家族・親族、市場、コミュニティ、国家の4セクターに注目し、その比重の違いを、ケア・ダイヤモンドと呼ぶ図に示した（落合ほか 2010）。

本共同研究は、これらのプロジェクトに連なるものであるが、次の点において異なっている。まず、「親族と社会保障」プロジェクトは、あらかじめ福祉の担い手としての国家と家族・親族に焦点をあてて出発しているが、私たちの共同研究は、アクチュアルなケア実践の場面で、あらわれつつある関係性に、最大の関心を寄せている。あらかじめカテゴリーを前提している見えなくなるような、フレキシブルなアクターのあり方に注目するのである。

一方、ケア・ダイヤモンドの図を提示した国連の研究プロジェクトは、ケアの供給者としての市場とコミュニティに注目しているところが前者と異なる。ただし、4セクターそれぞれの比重の違いに議論を収斂し、類型化しているところは、私たちのめざす方向と異なっている。この視点からとらえられるアクターは、それぞれのセクターの内部にとどまっているが、ケアの実践においては、1個のアクターが、複数のセクターを横断して関係を構築することも起こる。私たちの共同研究では、セクターの境界を超えてあらわれつつある新たな関係性に関心を寄せている。

ローカルな実践の並列的分析

これまで述べてきたことから明らかなように、ここで意

図しているのは、あらかじめ設定した枠に事例をあてはめていく、チョウの標本集めのような比較ではない。ケアの実践を、特定のローカリティのもとにとらえて、それを並列することから喚起される新たな視角をさぐるのである。それによって見えてくるものを提示し、分析することをめざしている（喚起 evocation については、マリリン・ストラサーンを中心に展開している一連の議論を参照（Strathern 2004; 春日編 2011））。

本研究には、人類学、社会学、歴史学の研究者が集まっている。人類学は民族誌の細部への執着に、社会学は制度やシステムを国際的な比較からとらえる視座に、歴史学は近代システムを史的なプロセスとしてとらえる視座に、それぞれの強みを発揮しながら、家族と社会の編成をめぐる、領域を横断する議論を展開していく。

【参考文献】

- Burchell, G. et al. (eds.) 1991 *The Foucault Effect*. Chicago: University of Chicago Press.
- Heady, P. (ed.) 2010 *Family, kinship and state in contemporary Europe*, vol.1-vol.3. Frankfurt am Main: Campus Verlag.
- 春日直樹編 2011 『現実批判の人類学—新世代のエスノグラフィへ』世界思想社。
- Mori, A. (ed.) 2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan* (SES 81). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 森 明子編 2014 『ヨーロッパ人類学の視座—ソーシャルなるものを問い直す』世界思想社。
- 西 真如 2012 「熱帯社会におけるケアの実践と生存の質」佐藤孝宏ほか編『生存基盤指数』京都大学学術出版会。
- 落合恵美子ほか 2010 「特集：ケア労働の国際比較」『海外社会保障研究』170。
- Strathern, M. 2004 *Partial Connections* (updated edition). Lanham: Altamira Press.

もりあきこ

国立民族学博物館民族文化研究部教授。専門はヨーロッパの文化人類学。著書に『土地を読みかえる家族—オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』（新曜社 1999年）、編著に『歴史叙述の現在—歴史学と人類学の対話』（人文書院 2002年）など。